

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

発音の自己調整学習を促す

日本語学習支援の意義と課題

— EPA ベトナム人介護福祉士候補者を

対象とした学習支援から —

吉田 恭子

2021年 9月

本研究は、日本語の発音に特化した学習支援活動の実践研究である。本研究における学習支援活動では、学習者が自己調整しながら発音を学習できるようになることを目指した。その上で、学習者の学習過程のデータや支援に対する認識から学習支援の意義や課題について考察した。以下、本論文の流れに沿って、概要を記述する。

## 第1章 序論

第1章では、筆者の問題意識、研究背景、研究目的、そして本論文の構成を示した。

本研究の研究動機は、筆者の日本語教師としての問題意識である。その問題意識とは、1) 学習者の日本語の発音が学習者本人の情意面にマイナスの影響を与える可能性があるという問題と、2) 日本社会で働きながら日本語を学ぶ学習者の発音学習の機会の少なさに対する憂慮の2点であった。

近年、日本国内の在留外国人は増加し、就労目的で来日する日本語学習者も増えている。超高齢化社会の日本において、就労目的で来日し日本社会の一市民として働きながら日本語を学ぶ学習者は今後も増加していくであろう。外国人介護人材としての活躍も期待されている。ところが、そのような日本語学習者のための発音学習の機会が多いとは言えないのが現状である。そこで筆者は、仕事のため時間が限られる日本語学習者が、主体的かつ能動的に自らを調整しながら発音を学習できるような、つまり発音の自己調整学習を促すことができるような学習支援が必要であると考えた。

本研究の目的は、発音の自己調整学習を促す学習支援の意義と課題を示すことである。そして、本研究の目的を達成するために以下の2つのリサーチクエスチョン（以下、RQ）を設定した。

**RQ1** : EPA ベトナム人介護福祉士候補者の発音学習過程において、本学習支援はどのような役割を果たしていたのか。

**RQ2** : EPA ベトナム人介護福祉士候補者は、本学習支援のメリットとデメリットをどのように認識していたのか。

## 第2章 先行研究

第2章では、本研究に関連する自己調整学習の理論と EPA 介護福祉士候補者に関する先行研究を概観し、本研究の位置づけをした後、本研究における用語の定義をした。

まず初めに本研究における自己調整学習がジーマン・シャンク（2011/2014）の提唱す

る社会的認知理論に基づく自己調整学習モデルであることを述べ、Zimmerman & Moylan (2009) に基づき、3段階の「自己調整の循環的段階モデル」について概説した。次に自己調整学習における学習支援についてまとめた。そして、日本語音声教育における自己調整学習に関わる先行研究から自己モニタリングが発音習得に影響することや発音練習の継続と自己調整に関わりがあることを示した。しかしながら、日本語音声教育の先行研究に自己調整学習の理論を基盤にした発音学習の支援活動のような実践研究は見当たらない。

次に、EPA 介護福祉士候補者について概説した。そして EPA 介護福祉士候補者の日本語教育に関わる先行研究には、国家試験の分析研究や専門用語に関するものが多いことがわかった。しかし、EPA 介護福祉士候補者の日常業務にも関わりのある発音学習に関する研究は行われていない。また、ベトナム語を母語とする日本語学習者が発音などの日本語の音声に関わる学習に問題を抱える傾向があるにも関わらず、ベトナム語を母語とする日本語学習者の発音学習の実践研究はあまり多くない。

そこで本研究では、国内で就労する外国人介護人材にとって、自己調整学習の理論を基盤とした発音のための学習支援活動にはどのような意義があるのかを明らかにする実践研究を行うこととした。

最後に、本論文における用語を定義した。

### 第3章 調査方法

第3章では、調査の手順、調査協力者、調査方法を提示した。

まず、調査は①調査Ⅰの学習支援活動のための事前インタビュー調査、②発音学習支援活動、そして、③調査Ⅱの発音学習終了後のインタビュー調査の順で実施した。調査協力者は国内の介護施設で働く EPA ベトナム人介護福祉士候補者 5名である。

①調査Ⅰ：事前インタビューでは調査協力者に個別に半構造化インタビューを行い、これまでの日本語や発音学習の経験などについて聞き取った。

②発音学習支援活動：期間は 10 週間で自習とグループワークを合わせてデザインした。学習支援者は 1 名（筆者）である。調査協力者に週 3～5 日の自習内容を「発音学習記録シート」に記録してもらった。また、週に 1 回 40 分程度のグループワークを行った。尚、本学習支援活動は SNS や Web 会議ツールを活用し、全てオンラインで実施した。

③調査Ⅱ：発音学習終了後の調査は、半構造化インタビューで調査協力者に本学習支援に対する認識を聞き取った。

## 第 4 章 調査結果と考察

第 4 章では、発音学習支援活動における調査協力者の発音学習の過程で得られたデータ、及び、調査Ⅱのインタビューデータの分析結果と考察をそれぞれ記述した。

まず、発音学習の過程で得られたデータのうち、「発音学習記録シート」の文字データはコーディングし、生成されたコードを自己調整学習の「自己調整の循環的段階モデル」を援用し演繹的に分析した。「発音学習記録シート」のコードの分析結果を表と図で示した後、自己調整学習のサイクルを進行させていくために必要な(1)メタ認知、(2)学習方略、そして(3)動機づけの観点から考察した。

(1)メタ認知の観点からは、「発音学習記録シート」が自己調整学習を促す役割を果たしていたということができた。調査協力者の学習過程のデータ分析の結果から発音学習過程においてメタ認知的活動が観察されたからである。ただし、日本語能力の高い調査協力者にメタ認知的活動に関わるコードが多く現れたことから、目標言語である日本語で記録する場合、学習者の日本語能力がその作用に影響を与える可能性があるといえる。

(2)学習方略の観点から考察したところ、本学習支援が自己調整学習を促す役割を担っていた点は2点あった。1点目は、学習方略に関する多くの選択肢を調査協力者に提供したことである。調査協力者は自分に合う学習方法を選択するきっかけができた。そして、2点目は、調査協力者の学習方略の個別性に合わせた自律性支援を行っていたことである。

(3)動機づけの観点からは、調査協力者5名が発音学習の実践によって生じた動機づけがあることがわかった。先行研究から自己調整学習サイクルの予見、遂行、自己省察の3段階全てに動機づけが重要な役割を果たしていることがわかっていることから、本研究の学習支援活動の実践自体が自己調整学習を促す役割を果たしたということがわかった。

次に、調査Ⅱのインタビューデータを分析しコード化した。学習支援の柱である「発音学習記録シート」とグループワークに対する調査協力者の認識の中からメリットとデメリットのコードに着目して考察した。「発音学習記録シート」に対する認識とグループワークに対する認識が以下の通り明らかになった。

### ・「発音学習記録シート」に対する認識

- a. 他者を観察するポイントはそれぞれ異なったものの、「発音学習記録シート」上で得たモデリングによる学びや気づきを、調査協力者たちがメリットとして認識していた。
- b. 調査協力者たちが「発音学習記録シート」上で行ったメタ認知的活動をメリットとして認識していた。しかし、それと同時に使用言語に関わらず思考を言語化するという作業

の難しさをデメリットと感じていた。

- c. 調査協力者たちが継続的に「発音学習記録シート」に学習内容を記録したことで、学習の習慣化・継続、そして結果的に日本語能力の向上に繋がったと認識していた。しかし、同時に日本語で記入することの難しさや目標設定の難しさをデメリットと捉えていた。
- d. 調査協力者たちが「発音学習記録シート」上の支援者による個別サポートにメリットがあったと認識していた。

#### ・グループワークに対する認識

- a. 調査協力者たちがグループワークに動機づけとしてのメリットがあったと認識していた。グループワークにおける学習仲間との交流がモチベーション維持や学習への意欲向上へ繋がっていた。そして協力者にとって必要な時間であったからこそ、グループワークの設定時間の短さや交流に割く時間の短さが不満として表出した。
- b. 調査協力者たちがグループワークにおける協力者同士の交流や意見交換、そして人々との交わりによって起こる相互作用にメリットを感じていた。
- c. 調査協力者たちがグループワークにおける支援者からのサポートにメリットがあったと認識していた。
- d. 調査協力者がテストや宿題を与えられ、教師から評価されるという学習スタイルを望んでいた。

## 第 5 章 結論

第 5 章では、まず本研究の RQ に答えた。次に RQ の答えを踏まえて本研究の結論を述べ、日本語教育への示唆と、今後の課題を提示した。

本研究の 2 つの RQ の答えから本研究の結論を得た。まず RQ1 の答えからは、本研究の学習支援が動機づけ、メタ認知、そして学習方略を促す役割を果たしていたことが明らかになった。この 3 つは自己調整学習を促す上で必要な 3 要素である。したがって、発音の自己調整学習を促進する学習支援として意義があったといえる。しかし、メタ認知の観点からは日本語能力の高い調査協力者にメタ認知的活動に関わるコードが多く現れたことから、目標言語である日本語で「発音学習記録シート」に記録する場合、学習者の日本語能力がその作用に影響を与える可能性があるといえる。

次に、RQ2 の答えからは、調査協力者からの学習支援に対する認識が明らかになった。学習支援の柱である「発音学習記録シート」に対する認識からは、モデリング、メタ認知

的活動、学習の習慣化・継続・日本語力向上、個別サポートに意義があることがわかった。そして、グループワークへの認識からは、動機づけ、相互作用、支援者からのサポートに意義があることがわかった。課題について「発音学習記録シート」では使用言語を問わず思考の言語化の難しさ、目標設定や日本語で記述する難しさが挙げられたが、結果的にはこれらの困難さを乗り越えて得られたメタ認知的活動や日本語力向上などがメリットとして捉えられていた。またグループワークの時間設定の短さに対する不満は、解消可能な課題である。

しかし、テストや宿題を与えられ教師から評価されるという学習スタイルを望んでいた調査協力者がいたことについては、調査協力者の学習観と支援者の支援の在り方にずれが生じていたことが明らかになった。これは支援者が調査協力者の望むままに支援をすればよいというわけではない。まず、そのずれを擦り合わせていくところから始める必要がある。また、2名の調査協力者が学習期間中、支援者に音声チェックを求め続けた。自分では間違いを見つけられないという理由からである。確かに本学習支援活動中には、調査協力者の発音の自己モニタリング力の向上は観察できなかった。しかし学習期間を延ばすことで発音の自己モニタリング力を促進させる可能性もある。これらは今後の課題である。

日本語教育への示唆として、本研究における学習支援活動では、発音学習の学習効果が学習者に自信を与え、自己効力感が生まれた様子を窺うことができた。今後も日本では就労目的で来日する日本語学習者たちの増加が見込まれている。そのような学習者たちが日本社会の一市民として自己肯定感を持って社会で活躍できるように支援すること、そこに発音のための学習支援の意義があると言えるのではないだろうか。

最後に、学習記録に使用する言語の選択、発音の自己モニタリング力の育成、そして学習者の学習観と支援の在り方のずれの問題については今後の課題としたい。

## 参考文献

- ジーマーマン, B.J.・シャンク, D.H. (編) (2014) 『自己調整学習ハンドブック』塚野州一・伊藤崇達 (監訳) 北大路書房 (原著 2011)
- Zimmerman, B.J., & Moylan, A.R. (2009). Self-regulation: Where metacognition and motivation Intersect. In D.J. Hacker, J. Dunlosky, & A.C. Graesser (Eds.), *Handbook of metacognition in education*. (pp.299-318) New York: Routledge.